

科学博物館ニュース速報

No.16 December 1, 2014

第16号 2014年12月1日

<イベントレポート>

農工祭関連イベント 大盛況！

11月7-9日の3日間、本学の学園祭「農工祭」が府中・小金井両キャンパスで開かれました。これに合わせ、当館を会場にして多様なイベントが行われ、賑やかな3日間となりました。

最大のイベントとなったのは、1階西側の展示室群を全て使って開かれた「科学技術展2014」です。2005年以降、研究機関における多様な研究成果を双方向型コミュニケーションによって市民に伝えていく「科学コミュニケーション」の活動が盛んになっています。科学技術展はこれに先立つ1987年の初開催以来、学生や教員が演説実験やポスター発表によって直接市民の方に最新の研究成果や様子を伝えてきており、非常に先駆的な取り組みであると言えます。

博物館には工学部から65の研究室等が集い、大学院生を中心として多くの方が常時待機・説明を行っていました。市民の方や他研究室の方に研究内容を説明するには、研究内容を十二分に理解する必要があります。大学院生にとっては、研究の目的や背景を見つめ直し、応用的な本学の研究内容の意義を考えるいい機会になっていたようです。研究室間の交流も盛んにみられ、賑やかで楽しい雰囲気が印象的でした。

同時に、研究に取り組み始めたばかりの学生たちによるポスター発表も行われました(下写真)。こちらは3階講堂と離れた場所での開催であったにもかかわらず、移動もままならないほどの人出となった時間帯もありました。学生たちは先生方の鋭いコメントにたじたじとなりながらも、練習を重ねてきたプレゼンを必死にこなしていました。

科技展もポスター発表も中高生が多く訪れており、年齢の近い学生から直接研究の話を聞くことで、キャリアパスも明確になったのではないのでしょうか。



さて、当館では他にも2つの学生サークルが体験型企画を行ってくれました。航空研

究会は昨年引き続きの出展で、工夫を凝らしたさまざまな飛行機(全翼機まで!)やロケットの展示、さらには飛行船の実演飛行で大いに来館者の皆さんを沸かせていました。カーボンファイバーの活用や自律飛行システムの開発など、学部生ながら高い技術を持っていることに来場者の皆さんは驚かされていたようです。

いつも博物館のガイドを行ってくれる「musset(ミュゼット)」は、今回は子供向けの実験イベントを連日行ってくれました。ふしぎ、きれいな、という「つかみ」を切り口にして、自然にその仕組みに興味を持たせることで深い理解につながっていたようです。以下に2サークルによる寄稿を掲載します。

(科学博物館特任助教 飯野孝浩)

航空研究会の展示を振り返って

私たち航空研究会(航空研)はラジコン飛行機やモデルロケットなどを製作しているサークルです。学園祭期間中の3日間、私たちは今年も博物館で自作の飛行機やロケットの展示と部員による解説を行いました。

1階の入り口付近では、今年の大会に出場した飛行機や600mまで飛ぶことができるモデルロケットと機体紹介の映像を展示しました。3階では、鳥人間コンテスト用に作成した全長2m以上ある翼も展示しました。特に今年度の大会に出場した飛行船「レカネ」のデモフライト(下写真)では間近で実際に飛行する姿を見ることができ、多くの人に飛行機の魅力を感じて頂けたと思います。

全体を通して、幅広い年代の方に展示物をご覧いただきご好評いただきました。これからも進化を続けていく航空研究会にご期待ください。次回の展示でも、皆さまのお越しをお待ちしています。

(航空研究会代表 森田遥希)



musset2年目の学園祭を終えて

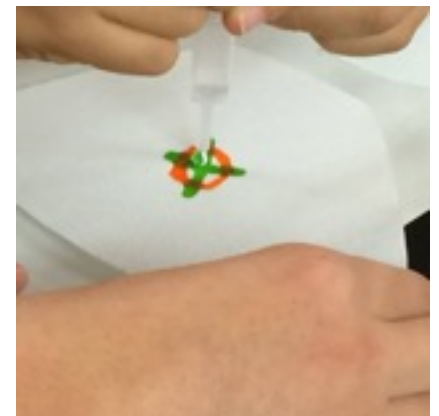
11月に行われた農工大工学部の学園祭において、私たちmussetは地域の子供を対

象に実験教室を開催しました。学園祭参加2年目の今年は、ガイドツアーを行わず、実験教室のみ行いました。

ペットボトルと醤油入れを使った浮沈子の製作と、コーヒーフィルターと水性ペンを用いたクロマトグラフィー(下写真)の2つの実験を行いました。完成した浮沈子の動きや、クロマトグラフィーの美しさに、子供たちだけでなく、その保護者の方々も見入っていました。あいにくの天気であったことと、今年の学園祭は規模が縮小されたことで、子供たちが来てくれるか心配でしたが、大盛況で終わることができました。

mussetは他の部活・サークルと掛け持ちのメンバーが多く、学園祭では人手不足の感もありますが、来年の学園祭では科学博物館の持っている魅力とより結びついたイベントを企画したいと思っています。

(musset代表 下村 優輔)



<ミニ企画展ご案内>

ミシンを識(し)る 一その構造発達と美一

12月2日(火)より、学芸員実習生によるミニ企画展が始まります。6月ごろから数百台のミシンの整理をはじめ、夏に各自で資料調査を行い、秋から展示作りを行いました。ミシンについてほとんど知識のなかった学生たちが、繊維技術研究会の小林成夫氏、岡村龍也氏から話を聞き、学びながらミシンを選び出し、展示を行いました。①ミシンのしくみ②ミシンの誕生と伝来③アンティークミシン④現代ミシンの歩みの4つのコーナーがあります。研究教育用のために窓を空けて内部の機構が見えるようにした通称「カットミシン」や、美しい意匠が施されたアンティークミシンなど、多くのミシンが展示されています。会期は2015年2月14日(土)までです。この機会にぜひお越しください。

(科学博物館特任助教 齊藤有里加)

〈開催報告〉

創基140周年記念写真展

会期:9月15日(火)~11月1日(土)

会期中入館者:2623人

本年は、農学部・工学部の前身となる機関が1874年に設置されてから140年の節目の年でした。当館でもこのメモリアルイヤーに合わせ、本学の歩みを写真で振り返っていただける特別展「東京農工大学創基140周年記念写真展」を開催しました。

戦前~戦後にわたる過去の卒業アルバムや、同窓会が所蔵されている日常風景スナップを中心に、航空写真で府中・小金井キャンパスの変遷を振り返る企画展示などを実施しました。

期間中にはOG・OBのグループ見学が何度もありました。その中で、現在はなくなってしまった建物の写真を前に、時には熱く、時にはしみじみと過去の思い出を振り返っていらっしやる姿に何度も出会いました。色あせた写真になってしまっている、風景には人の記憶を強く呼び覚ます力があるのでしょうか。高等蚕糸学校の校長をつとめられた本多校長のご家族にもご来場いただき、西ヶ原キャンパスでの思い出などを教えていただきました。

当館が現役の教職員や学生のみならず、これまでの構成員・関係者のみなさまのひとつの拠り所になっていければ、と決意を新たにした特別展でした。

(科学博物館特任助教 飯野孝浩)



昭和32年繊維工学科卒のみなさま

〈開催報告〉

絹に描く—透かしの効果—

東京大学史料編纂所の協力により、「絹に描く—透かしの効果—」をシャルドンネギャラリーにおいて2014年11月5日~11月22日の2週間にわたって開催いたしました(期間中見学者3540名)。落ち着いた空間が館内に現れました。

絹は、古くから日本画・東洋絵画の基底材として幅広く用いられています。背後が透けて見えるように隙間を開けて織り、その特性を活かした制作技法などが培われてきました。

幾重にも重なる絹が奥行きを演出し、見る角度によってさまざまな表情を見せます。展示された作品群はどれもとても美しく、また伊藤若冲などの著名な作品にも絹絵の様々な技法が用いられることも紹介されました。素材や技法といった

側面から、展示された作品ごとの特性を感じる事が出来ました。一年の中でもにぎやかな学祭の時期と、キャンパス内の紅葉とがあいまって、印象的な展示となりました。

(科学博物館特任助教 齊藤有里加)



〈世界の博物館見聞記 第1回〉

Musée Curie (キュリー博物館)

世界の特色ある博物館をご紹介します。この「世界の博物館見聞記」, 初回はフランス・パリにある小さな大学博物館「Musée Curie(ミュゼ キュリー, キュリー博物館)」を取り上げます。

マリー・キュリーで有名なキュリー一族には、合計で実に5人のノーベル賞受賞者を輩出しています。1934年に設立された本館は、現在はマリーを中心とした一族の研究遺産の収集・保存、市民への科学の啓蒙などを行っています。数年前にリニューアルされた館内はさほど広くなく、小さな展示室がいくつかと売店のみです。マリー・キュリーの実験室を再現した部屋にはクラシックな試験管などが並び、往時の雰囲気・空気感を伝えます。一族がさまざまな実験に用いた器具は、情報と資料がしっかりとデザインされた展示として館内にずらっと並んでいます。当時用いられたままのセットアップでの機器群は、デザインされた当時の目的や課題を雄弁に物語っていました。

日本は科学技術立国を自認しながら、研究過程での苦闘や工夫の公開を通じて科学研究の有りさまを市民に伝える問題意識が弱かったと感じます。大学博物館の役割はまさにそこにあると思うのですが、いかがでしょうか。

(科学博物館特任助教 飯野孝浩)



写真:下部の小さな白いチューブに入ったラジウムと、保管のための鉛の箱

留学生のための博物館ツアー

本学は近隣の国立大学と連携した交換留学プログラムに取り組んでおり、東南アジアからの学生を多く受け入れています。かれらを対象とした博物館のガイド

ツアーを、mussetの学生たちが2回にわたって開いてくれました。英語でのガイドは初めての学生ばかりでしたが、留学生と年齢が近いこともあり、徐々に打ち解けてフランクにガイドをしてくれていました。留学生たちは日本の教育・研究の歴史や文化に対してとても好奇心が旺盛で、満足して帰ってくれたようです。

繊維産業が日本の近代産業を牽引したこと、本学がその最先端であったこと、そして時代の要請に応じて研究分野を広げてきたことについて、強い印象を抱いたようでした。友人を連れて後日再来館してくれた学生もおり、いい思い出になったようです。

(科学博物館特任助教 飯野孝浩)

博物館日誌

当博物館では、博物館グッズ、F Sセンターの生産物を販売しています。常日頃から、それらをちょっと広告する方法はないかと考えていました。そこで、「手書きPOP(ポップ)の書き方」というセミナーに参加しました。

POPとは本屋さんの本の陳列の前に、紹介や説明が記載されている「ちょっと広告」です。綺麗に見せるために、それなりのルールがあることを知りました。独自の文字や数字の字体があります。たった2時間の勉強だったので、到底、身に付くまではいきませんが、とても勉強になりました。街で出ると、広告が当り前にあり、全く気にせず生活をしていましたが、それらの技巧、工夫が気になる昨今です。

(科学博物館事務 北川和幸)

【12月・1月】

科学博物館活動カレンダー

★ミニ企画展

「ミシンを識る その構造発達と美」
12月2日~2月14日

★子ども科学教室

動物を学ぶふれあい教室
科学博物館3階 多目的実験室
12月6日 9時 - 12時

★連続講座 製糸機械の変遷【予約不要】

第3回「乾繭機と煮繭機」
三戸森領夫氏
12月13日 13時30分 - 15時30分
科学博物館3階 講堂

★繊維技術研究会講演会【予約不要】

「放射能・放射線とどう向き合うか(第2話) ~安全安心のための科学的な理解に向けて~」

國眼孝雄氏(本学名誉教授)
12月20日 13時 - 15時
科学博物館3階 講堂

「(仮)電子顕微鏡について」

伊達直毅氏(繊維技術研究会)
1月31日 13時 - 15時
科学博物館3階 講堂

「科学博物館ニュース速報」第16号

◆発行日 2014年12月1日

◆編集 科学博物館ニュース速報編集委員会
梅田倫弘、齊藤有里加、飯野孝浩、北川和幸

◆発行 東京農工大学科学博物館

◆連絡先 kahaku@cc.tuat.ac.jp
042-388-7163